書肆えん通信

No.10

2025・6・3
書肆えん
秋田市新屋松美町
5－6

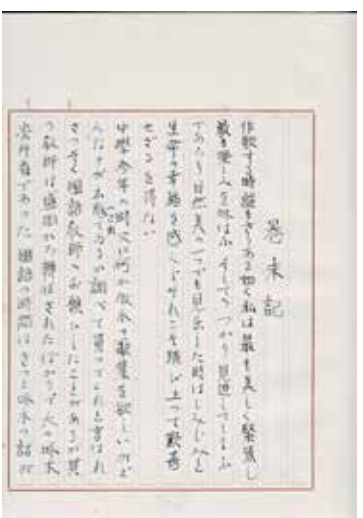
巻末記……武藤　晃…1

巻末記

武藤　晃

作歌する時誰もさうある如く私は最も美しく緊張し最も樂しみを味はふ。そしてうつかり見逃してしまふであらう自然美の一つでも見出した時はしみじみと生命の幸福を感んじそれこそ跳び上つて歡喜せざるを得ない。

中學參年の時父に何か牧水の歌集を欲しいがどんなのが出版されてゐるか調べて貰つてくれと言はれさうそく國語教師へお願ひしたことがあるが、其の教師は盛岡から轉任されたばかりで大の啄木崇拜者であつた。國語の時間はきつと啄木の話が出、歌がとび出してくる。そして啄木を語る時の先生は最も樂しさうであつた。今は不帰の客とはなつたが此の先生が釀し出しアトモスフェアが私の歌の温床となつたと思はれる程同先生には今だになつかしい思ひ出がある。其の先生は佐々木先生と言はれた。秋田中學を終へる頃鄉村の小學校に奉職され今なほ勤續されてゐる創作社の中川正男氏があるが、同氏を先輩と仰ふぎ私は始めて作歌へのスタートをした。そしてこの中川氏と武藤俊一、志賀三郎の両氏等と謄寫刷「玄土」を毎月出すことにし



「巻末記」

て「アララギ」の大黒富二氏、ぬはりの遊佐良雄氏等の批評を戴きずいぶん勉強もしたが、短歌とは單に三十一文字を並べて一文體を形成さすべきもののみではないことをはつきり知つてゐたのは中川氏だけと言ふ徹底した初心ぶりであつた。又此の頃創作社に入り平賀春郊先生の批評を戴いて勉めてゐたが盛岡へ行くやうになつてから間もなく退社してしまつた。

盛岡ではぬはりの小田嶋孤舟氏、遊佐良雄氏、常春の上野節夫氏、自然の関徳彌氏其の他現在、ぬはり社、

歌集『かっこべ』の背文字と、扉

常春社、自然社、國民文學社其の他の同人として活躍されてゐる諸氏と會ひ色々教へられましたが、岩手縣總合短歌研究雜誌「みちのく」に入社して專ら小田嶋先生に師事してゐた。啄木を生んだ地、又菊池知勇氏を出してゐる盛岡は私に太陽の光線をふんだんに送つてくれた。私は短歌の形式以外のものとしての深さ、美しさを少しづつ理解してきた。私は藝術をまづ短歌から通して短歌を學ぶと同時に理解してきた。川の中をひた押しに流されて來たやうなこの盛岡時代を經驗して昭和九年仙台へ医師として就職してからは全く歌から遠ざけられたやうな淋しさだつた。わづか鄕里から送られてくる玄土になぐさめられてゐるだけでみちのくはおきまりの經濟難から殆んど發行を見なかつた。九年の末常春に入社して足かけ三年になつた現在、はるか幼いながらも歩んで來た十年の經過を思ふ時よくも熱中して作歌しつづけたものと思はれてならないが、自分の歌を讀みかへしてゆく時其の時の自分の姿があまりにもはつきり浮んでくる。

私は今私の作品を集めて見た、たゞ集めて見たのにすぎないのがこの一冊である。勿論皆がさうするやうに自分の歌の自選もし修正も加へたものであるが、歌集と名附るにはあまりにも幼い歩みの記錄である。歌の

配列は少しも年代に分けなかつた。私はむしろ今迄の歩みを一年代として見たいし、この一册を土台にして新しい觀界を開きたい望みで一杯だ。そして私の歩んで來た一年代として他人にも見て戴きたいと願つてゐる。その意味で此の一册の歌の配列も対稱を求めて、例へば月、夏草、吾子、雪と言ふやうに書いた次第である。なほ此の一册中の歌は主としてみちのく誌、常春誌に載つたもののすべてと玄土記載の一部分である。

（昭和拾壱年八月末日記）

【歌集『かっこべ』より】

夏草（五首）

果樹園に人もなければあからひく晝を鬼百合赤く咲きたり
日一日木蔭をつくる山路に縞蛇一つ凉むを見たり
疊よりおはぐろとんぼとびゆきし庭の小萩に風流れたり
家人の安眠（やすいね）をしてしづかなりこの夜を白くてっぽうゆり咲き
鉢に咲くてっぽうゆりのしづけさよ文づかれの目の高さに白く

吾子（十三首）

十一年三月十六日　長女紀子誕生す

妻と子とねむれる夜の産室にストーヴの音こもりて燃ゆる
つかれたる妻のえまひのやすらかさ心に觸れて約しきかも
見てあれば子は眼を開けぬ父われのこの喜びを知るべくもなく
笑ひ出す日も樂しけれねむるとて乳を飲むとて覗くこと尠し
口元の可愛ゆき子よと言はれたりその口元の無性に可愛ゆ
朝覺めていまだ子供のねむりゐるしづけき部屋に手足をのばす
何氣なく手にさはりしに笑ひたり子はあどけなき初笑ひせり
氣嫌良く初笑ひせし子に妻も妹も來て笑はせんとす
庭松のしげき葉組をとほしくる朝光すがし子を抱きて歩む
朝早に子を抱きつれてオリムピックの放送きこゆる外

に出て来つ
胸高に抱きあげられてはしやげる吾子声に出し笑ふ朝かな
胸を踏み手をふり吾子の持つ力しみじみと腕にひゞきくる朝
蟬声に鳴く朝澄のうらみちを折れて水汲む人過ぎゆけり

月（一首）

重症患者の部屋を出て來てさし込める月光を青き色にたゞ見し

雪（三首）

夢に覺めし心乏しも新雪の早冷えつきて樹をすべる音
常磐樹に一夜降り積む新雪のあかとき冷えて風出でにけり
吹雪くる山澤の空の黒雲に日の入らんとすすさまじきかな

冬の故里（七首）

故里に近しと思ふに吹雪吹き秋田平野は見えざりにけり
晴れし日は宵毎ふかき雪解靄に遠海鳴りのこもるしたしさ
あはあはと冬日の落つる山を背に水汲むは村の俊一ならし
故里の落陽（おちび）はかなししばらくも村を離れて見ざりけるかも
雪解けの空のあかるさ玻璃戸辺にうつつなく見る雲しづかなり
氣にかゝりし障子の破れつくろひて心安けく炬燵にあたる
夕づきてしづまりかへる杉山の鉾に入る日光（かげ）流れて寒し

【後記】

長年、古文書の解読でお世話になっている嵯峨稔雄さんから義父の日記（「上海出征記」）の制作を依頼された。その校了時に見せられた、手書きの、たぶん一冊だけ製本されたとおもわれる歌集から、略歴の参考に「巻末記」をのせたが、若干余白があったので、歌を付け加えた。

旧字と新字の表記はそのままにし、また、若干句読点を補ったところもある。（J）